

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究(3)-他者-

日時:2014年6月29日(日)

場所:AA研棟3階マルチメディアセミナー室(306号室)

報告者:1. 船曳建夫(AA研共同研究員・東京大学名誉教授)

2. 花村俊吉(AA研共同研究員・京都大学)

内容: 1. (発表要旨)

「社会関係の中の他者—私以外のすべての人は他者である」(船曳建夫)

(0) これまでの議論

先の二つの論文、「人間集団のゼロ水準」(以下、第1論文とする)と「制度の基本構成要素」(以下、第2論文とする)で、われわれは次のことを推論した。

第1論文では、「人間は、出会い、対面する他の人間と相互に了解の関係を取ることが可能である」とし、「その関係の可能性を保っている、無限の位置の広がり、『場』と呼ぼう。・・・場は、人間の相互了解の行為によって場面として切り取られる」とした。その時に、場面上に乗っている人間だけではなく、向こう側の人間とも同時に了解の関係をとり、かつ、それが持続するためには、抽象的な意味で「高さ」構造が必要であるだろう、と論を進めた。

第2論文では、その高さがどのようにして作られるかを、「制度」の問題として考えた。われわれは、ABという二者間関係から出発して、それが対面的な二者間関係から、第三者が現れて、三者以上の関係になるとき、原理的にその複数の当事者にとって、相互の了解は、手に負えないほど困難になるはずだと推論した。われわれが得た結論は、三者間関係の第三者とは、二者間関係を保証する第三項として働いている、というものだった。そして、その第三項が記号的な象徴となるとき初めて、われわれの社会制度が成立する、と論じた。

さて、この二つの論文に続くものとして、「他者」を考えると、議論の流れは、第2論文の中で示唆した次の推論を考察することにつながる — 「・・・二者間関係を取り結びうる、換言すれば第2者となり得る存在、なのである。それをこそ「他者」と呼ぶのではないか」。

(1) 困難ではなく、苦悩としての他者

近代に始まった他者についての難問というのは、「周りにいる人のことが分からなくて不安だ」、ということから出発しているようだ。これは、近代になって、ヨーロッパで身分制のたがが外れたり、宗教の重しが軽くなったり、たとえばその前にアジアでは中国の宋の時代、商活動と移動の自由が保証されるようになり、地球上のある限定された地域で、人は、対面的ななじみのある社会関係から、第2論文でいう、 α を第三項として共有する、多くの知らない他人と関わり合う場面が日常的になった。すると、他者との関係の取り方の難しさは、社会的な困難だけではなく、個々人内面の、苦悩となる。苦悩としての他者が出現する。

この研究会で、「他者」という課題を立てるときには、「苦悩としての他者」という魅惑に取りこまれることなく、だからといって、それを無視するのでもなく、それを見据えつつ、人類の社会的な水準において、社会的な他者がどのような意味を持っているかを探る、という立場で、「・・・二者間関係を取り結びうる、換言すれば第2者となり得る存在」それが他者だ、という議論を進めようと思う。

(2) ムボトゥゴトゥの儀礼における、二者間関係と第三項 α の不在の克服

ムボトゥゴトゥの儀礼には、ニマンギ儀礼とナラワン儀礼の2カテゴリーがある。いずれも、階層性のシステムを持ち、各階層にそれぞれの儀礼表現とその表現を使用する権利とがある。その中で、ナラワン儀礼はいわゆる秘密結社であり、「秘儀」を知るものが死に絶えたとき、また、秘儀を知るものが伝承を拒否したときには消滅する。儀礼を司る上位者（第2論文で言うところの、もの化した第三者としての第3項、 α ）が儀礼の定義上「いない」時には、儀礼の権利譲渡の二者間関係が成立しないのだ。

しかし、ニマンギ儀礼は公開で行われ、それぞれの階層のメンバーにはその階層の舞踊や偶像製作の特権が認められているが、その「技法」は、儀礼が公開的であるがゆえに、誰もが知っている。そのとき、ある個人Aがある階層Pの儀礼を行いたい、と考えたときその階層Pのメンバーがいないときはナラワン同様その儀礼は消滅するのか。そうではない。儀礼を司る上位者（第2論文で言うところの、もの化した第三者としての第3項、 α ）が儀礼の定義上「いない」時にも、Aはある個人Bにその権利にふさわしい贈り物を公開の場ですればよい。そして、ある個人Cが、特定の個人と言うよりは、システムのある役割として、擬似的な上位者、第2論文における α の位置に立ち、その儀礼を執り行えばよい。その時、いかなる個人も男子でイニシエーションを終えていれば、「B」として二者間関係に入ることが出来る。また、いかなる個人も、象徴的な記号としての儀礼を執行する者、 α になることが出来る。

(3) 「手紙」という二者間関係

議論の対象に手紙を取り上げるのは、これが、二者間関係に特有のものだからだ。しかし、手紙が手紙としてそのままのものであったら、手紙は書かれて受け手に読まれて、社会的なものとはならない。ここで挙げる新約聖書、夏目漱石の小説、『心』の中の「先生の書簡」も、パウロの『書簡』も、本発表者の私によって読まれてしまって、書き手と読み手の二者間関係の外に出てしまっているから、手紙ではなくなってしまう。しかし、手紙は手紙でなくなって初めて、社会的には手紙（ここからはそれをとりあえず、テガミと書いて、区別する）となるのだ。

漱石の『心』の先生の遺書は、手紙小説という手法を取ったことで、フィクションの内と外で、手紙とテガミの二重性を獲得した。外では私に読まれたテガミだが、小説の中の先生の遺書は、第三者に読まれるものとしては書かれていない。手紙文学は、テガミを盗み読ませることで、第三者でしかない読者を、「あなた」にしてくれる装置として働く。すなわち、読者を「あなた」という第二者に、書き手との間の二者間関係に引き込むことにある。

パウロの『書簡』も最初から多くの「あなた」に読ませるテガミであったと言える。そのテガミの中で、パウロは、たとえば、「兄弟たちよ、私たちは主イエスにあってあなた

がたに願ひ、そして勧める」と書く。この手紙は、自分（たち）はあくまでもキリストの「下（もと）」にあって、あなた（がた）との二者間関係を持ち、そのことで、あなたがたは、私（たち）と同一の第一者（神のしもべとしての兄弟）になり得るのだ、との勧誘だ。もちろんすでに述べた二者間関係の構造から言えば、主イエスと、私（たち）と、あなた（がた）との三角形を成し、それは、私（たち）とあなた（がた）が共に兄弟となつて、 α に対して、二者間関係を持つこととなる。『心』のテガミが、読者を第三者の気分にさせ、フィクションの当事者に引き入れるように、パウロの『書簡』は、読者を相手を含む第1人称複数の「私たち」に引き込むのだ。

（4）yumiとmifala

ここで、本論文の問い「「・・・二者間関係を取り結びうる、換言すれば第2者となり得る存在、なのである。それをこそ「他者」と呼ぶのではないか」に戻ってみる。

それは最後のパウロの『書簡』に見られる、「あなた」を「私」と同じ1人称、「私たち」と見なすとならえ方についてである。1人称には、包括的1人称と排他的1人称がある。日本語の上代語には、アとワがあり、それぞれ、排他的1人称と包括的1人称を指す、かも知れない、という説がある。ムボトウゴトウ語にもそれがある。しかし、もっと広く、pidgin Englishには、印象的なmifalaとyumiという1人称複数がある。前者は排他的、後者は包括的1人称である。排他的1人称という二者間関係は、『心』の手紙がテガミになることに見られる。包括的1人称という二者間関係は、パウロの書簡に見られる。

（5）結論

十分に論議は尽くされていないが、ムボトウゴトウの儀礼と、手紙の例、排他的、包括的な1人称複数の例が、導こうとしているのは、次のような結論である。人間の関係は常に二者間関係である。社会的関係は二者間関係の重なりである。第三者は、そのままでは、二者間関係にあるA、Bと直接に社会的関係を持ち得ない。二者間関係にあるA、Bの α を共有することで、二者間関係のAとBと、それぞれに二者間関係に入ること、A、Bとの社会関係に入る。

内容：2.（発表要旨）

「チンパンジーにおける「他者」：不意に到来するよそ者の声、新入りメスと在住個体のふるまい方の違い」

（1）はじめに

「他者」は、「自己」にとって不意に到来する、捉えようとしても捉え切れない存在であるが、その「自己」も、「他者」から働きかけられ、「他者」に働きかけることで、生まれ、変化してゆく。その一方で、「自己」は「他者」を、それまでの相互行為の有無や結果、その「他者」に対する「第三者」のふるまい方、あるいは（言語表象を持つ人間の場合は）何らかの範疇を参照して、一定の存在として捉えることがある。そして、複数の個体たちが、普段付き合いがなかったり、皆とは異なるふるまいを示したりする「他者」（たち）を、同じように「よそ者」として捉え、そのことを互いに理解したとき、彼らはその「よそ者」との差異において「仲間」として立ち現れることになる。こうして集合的に成立する「自己（仲間）」と「他者（よそ者）」も、その差異が感知されたときに同時に立ち現れるもの

である。その境界は、複数の個体たちの間で一枚岩的なものでもなければ、あらかじめ共有されているわけでもなく、相互行為を通じてそのつど変化していく可能性があるが、結果的に、繰り返し同じように区切られることもある。

野生チンパンジーは、そのつど顔ぶれの異なる一時的なパーティ（視覚的に接触している範囲にいる個体たちの集まり）を形成しつつ、出会いと別れを繰り返す数十頭から百頭ほどの個体たちが持続的な集団を構成する。別れた個体どうしが数分後に再会することもあれば、そのまま数週間出会わないこともある。そうして離合集散しながら集団生活を送るチンパンジーたちは、多様な場面で、半径1~2kmの範囲に届く長距離音声・パントフートを発声する。パントフートは、あるパーティの個体たちの間ではしばしばコーラスになり、異なるパーティ間でそうしたコーラスが鳴き交わされることもある。本研究会の前身である『制度』では、マハレM集団（タンザニア）のチンパンジーたちの、非対面下でおこなわれるパントフートを介した相互行為の動態と、それを実現するプロセス志向的な行為接続の慣習について考察した。

しかし、ときに他集団個体と思しきパントフートが聴こえてくることがある。本発表では、そのような場面を取り上げ、野生チンパンジーにおける「よそ者」およびそれに対応する「仲間」の現れ方や「よそ者」への対処の仕方、そのときその場にいる個体どうしのふるまいのズレや一致について検討し、上述のような『他者』（と「自己」）の在り様にアプローチする糸口を探った。

なお、調査時期によって大きな違いはあるものの、マハレを含めたいくつかの調査地で、集団を異にするチンパンジーたちの間に、稀に身体接触を伴う敵対的交渉が生じ、その結果、死んでしまう個体もいることが確認ないし推測されている。そのため、これまで集団間の敵対性が強調されてきた。しかし、どの集団のチンパンジーたちも離合集散しているため、ある場面で接触するのは各集団の一部個体どうしであり、集団を異にする個体どうしの個々の相互行為を、そのまま「集団」と「集団」の関係として一括りにできるわけではない。他集団個体との接触時に、彼らが自分たちを「ある集団に属する個体」として、相手を「自集団とは異なる（しかし自分たちと同じような）集団に属する個体」として認識しているかどうかはわからない。また、近年、多くの調査地で、集団を異にする個体どうしの接触の大半は聴覚的なものであるということが確認されてきている。マハレM集団では、その遊動域（普段彼らが利用している場所：約27km²）の北側と南側にそれぞれ別の集団の遊動域が拮がっていることがわかっているが（東側は山塊でアクセスが困難なため不明な点が多く、西側は湖）、ここ10年ほど、他集団から移入してくるメスを除き、他集団個体との視覚的な接触は報告されていない。

（2）「よそ者」の現れ方、「よそ者」への対処の仕方

M集団のチンパンジーたちは、主食となる果実の実り具合やその分布の仕方に影響を受けて、時期によってその頻度は変化するものの、年間を通じて、遊動域の外縁部から他集団個体と思しき声が聴こえる北や南の周辺部を遊動することがあった。しかし、チンパンジーの観察中、実際に遊動域の外縁部から声（その多くはパントフートかパントフートを伴う騒ぎ声）が聴こえてきたのは、1年間186日の調査で5日、計16回のみであった。それ以外の、M集団他個体と思しき声は、パントフートかパントフートを伴う騒ぎ声に限っても、平均して1時間に1~2回聴こえてくるため（ただし1日中聴こえてこないことも

1日に84回聴こえてくることもある)、遊動域の外縁部から声が聴こえてくることは稀なできごとだと言うことができる。

遊動域の外縁部から声が聴こえてきたとき、彼らは、普段それ以外の声を聴いたときには、滅多に、ないしはまったくみられないふるまいを示すことがあった。たとえば、緊張や不安の表れとみなせる下痢便、乳首触り、その場にいる個体どうしの凝集、手伸ばしや抱き合いなどの身体接触がみられたり、その場にいる皆で、新奇なできごとや危険な他種との遭遇時に発されるラーコールを発声したりすることがあった。そのため彼らは、これらの声を、少なくとも、「普段あんなところから声は聴こえてこない」「いつもと違う」というかたちで、よくわからない「よそ者の声」として聴くことがあり、その声に緊張や不安が喚起されることがあると考えられる。そのあとその声が発された辺りで、食痕や糞、ベッドなどの痕跡を発見したときにも個体どうしの凝集や身体接触がみられることがあったため、彼らは痕跡からもそうした「よそ者」の気配を感知することがあると考えられる。

その一方で、その場にいる皆で吠え返して敵対的に働きかけたり、数十秒後にパントフートをコーラスして相手の応答に耳を澄ませるなど探索的に働きかけたりすることもあり、声や痕跡と遭遇したあとの遊動パターンも様々であった。たとえば、声とは反対の方に向かい、関わりを回避するようにふるまうこともあれば、そのままそれまでの活動を継続して何事もなかったようにふるまうこともあった。また、声の方に向かったりパントフートを発したりといった探索的なふるまいが、さらなる声や痕跡との遭遇をもたらし、それがまた探索的なふるまいを産み出すという、「声や痕跡との遭遇」と「探索的なふるまい」とが互いに他をもたらす循環的な過程が生じることがあり、その過程で次第に「よそ者」が具現化し、最終的にはその「よそ者」との激しい声の応酬に至ることもあった。

そして彼らは、そのときその場にいる個体たちと、身を寄せ合ったり、ともに移動したり声を発したり、場合によっては、その日それまで断続的に鳴き交わしつつゆるやかにまとまって遊動をともにしてきた、そのときその付近にいる他のパーティと鳴き交わしを試みたり合流したりしていた。こうして遊動域の外縁部から聴こえてきた声を、同じように「よそ者の声」として聴き、ともに対処することになった複数の個体たちは、その「よそ者」との差異において「仲間」として立ち現れていたと考えられる。したがってチンパンジーは、不意に到来する「よそ者」の声に、緊張や不安を喚起されつつも、そのときその場やその付近にいる「仲間」とともに、プロセス志向的な態度で状況に応じて様々なかたちで対処していたと言うことができる。

(3) 移入してきたメスのふるまい方の変化、「仲間」の拡がり

遊動域の外縁部から聴こえてきた声に対するふるまい方には、個体差や性差、年齢差があったため、「よそ者」の捉え方は、M集団の個体たちの中で一枚岩的なものでもなければ、あらかじめ共有されているわけでもないだろう。しかし、「よそ者」への対処の仕方は個体によって違ったり、同じ個体でも状況によって違ったりするものの、少なくない個体たち(ワカモノ以上)が、それぞれ別の場面で、遊動域の外縁部から聴こえてきた声を、「よそ者の声」としてある程度同じように聴いていた(普段それ以外の声を聴いたときとは異なるふるまいを示していた)。そのため、どこから聴こえてきた声を「よそ者の声」として聴くかという、場所(遊動域)とリンクした「よそ者」の捉え方は、彼らの間である程度分有されているように思える。日々離合集散しながら生活するなかで、頻度は少なくとも、

そのつど様々な個体たちとともに遊動域の外縁部から声を聴き、互いのふるまいを観察したり互いのふるまいに同調したりすることを繰り返すことで、多くの個体がそれらの声を同じように「よそ者の声」として聴くようになるのかもしれない。

たとえば、事例数が少なく断定はできないが、他集団から移入してきて数年内の「新入りメス」たちは、遊動域の外縁部から声が聴こえてきたとき、緊張や不安も示さず、そのときその場にいた、集団に長年滞在してきた「在住個体」たちとは明らかに異なるふるまいを示すことがあった。そのため新入りメスたちは、その声を、在住個体たちと同じようには聴いていない可能性がある。しかし、そのようなメスたちも、いずれは他の在住個体たちと同じように「よそ者の声」を聴くようになるということが、少なくとも2頭の長期的なふるまいの変化から示唆された。新入りメスが、声を聴いて普段とは異なるふるまいを示す住個体たちの様子をじっと見たり、突然方向転換した在住個体たちの様子に混乱しつつもそのあとを追い、在住個体たちとその「よそ者」との相互行為に巻き込まれたりすることがあったため、そうしたできごとを繰り返し経験することで、新入りメスもその声を「よそ者の声」として聴くようになるのではないだろうか。だとすれば、「自己」（新入りメス）は「他者」を、その「他者」に対する「第三者」（在住個体）のふるまい方を参照して、一定の存在（「よそ者」）として捉えるようになることがあると言えるだろう。

また、(2)節で考察したように、個々の場面で「よそ者」にともに対処する「仲間」として具体的に立ち現れるのは、そのときその場やその付近にいて同じようにふるまうことになった個体たちだと考えられる。しかし、頻度は少なくとも、そのつど様々な個体たちと同じように「よそ者の声」を聴くということが繰り返されているならば、そのたびにその様々な個体たちが「仲間」として立ち現れているはずである。その経験を通じて、「よそ者の声」を聴いたとき、そのときその場やその付近にいない個体たちも含めた、集団を構成する全個体に近似するような、「普段付き合いのある知り合いたち」が漠然と「仲間」として感知されることもあるのではないだろうか。それゆえ突然遊動域の外縁部から声が聴こえてきたとき、その声を、単に「普段あんなところから声は聴こえてこない」というだけでなく、そうした「知り合い＝仲間」ではない「よそ者」の声として聴くことが可能になっているのかもしれない。ただし、「よそ者」との相互行為が生じ、その過程で「よそ者」が具現化していくような場合には、それに応じて、そうした漠然とした「知り合い」ではなく、そのときその場やその付近にいる個体たちが「仲間」として強く感知されることになるだろう。

(4) 今後の課題

以上の考察、とくに後半(3)節の内容は仮説に過ぎず、さらなる検討が必要である。また、個体レベルの「自己」と「他者」の在り様と、集合的な「自己（仲間、われわれ）」と「他者（よそ者、かれら）」の在り様との関係についても整理が必要である。さらに、人類社会の進化という観点から「他者」を論じるためには、言語表象の有無も含めて、人間とチンパンジーの、「他者」（とそれに対応する「自己」）の現れ方や「他者」への対処の仕方を比較考察することが欠かせないだろう。そのため本発表では、最後に、とくに東アフリカ牧畜民の集団間関係に関する先行研究との比較を試みたが、この点も今後の課題としたい。